チベット語占卜書中の神格[1]
――その効果と意義についての一考察――

西田　愛

Deities among Tibetan Divination Texts

Nishida Ai

Abstract：Among the Old Tibetan divination texts from the Dunhuang cave and other sites along the Silk Road in East Turkestan, dice divination texts are predominant in number and in diversity of provenance. These Old Tibetan dice divination texts were produced mostly during the Tibetan Imperial period, and they were certainly the most popular divination method throughout the Imperial period. This divination method is still in use in various regions of Tibetan cultural areas, as already mentioned by foreign and Tibetan scholars.

Starting with an overview of dice divination texts which are prevalent at present, I shall offer the examples of divination practice in Ladakh and Bhutan, both of which were recorded during my field researches in 2009, 2011, and 2013. By comparing these views with the Old Tibetan texts, especially focusing on the deities who are in charge of the divination, I shall examine the background of Tibetan dice divination as well as its historical transition.

关键词：骰卜，拉达克，不丹，敦煌文献，古藏文
Keywords：Dice Divination, Ladakh, Bhutan, Dunhuang Manuscript, Old Tibetan

---

[1] 本稿は2010年度小林フェローシップ（富士ゼロックス株式会社 小林節太郎記念基金）および JSPS 科研費（JI300004024）の助成により実施した研究成果の一部であり、小林フェローシップ終了後に提出した報告論文「現代チベット文化圏における骰子占卜の研究――チベット語骰子占卜書に関する覚え書き――」に加筆・修正を加えて大幅に改変したものである。

1　はじめに

20世紀初頭に敦煌石窟をはじめとする中央アジアの諸遺跡よりもたらされた古チベット語文献の中には、骨、サイコロ、銅銭、鴉の声、夢、星、日時など多種多様な占卜法に関する文献が存在する。このうち、最多数を占めるサイコロ占卜文献は、敦煌のみならず古代チベット帝国の軍事拠点であった西域南道のマザールターグ、そして西域北道のトルファンからも出土している。これらの大部分は巻子本あるいはその断片と考えられるが、敦煌出土の一点は冊子本の形式を持つ。したがって、古チベット語サイコロ占卜文献は、西域南道に帝国の軍事拠点が存在した時代（790c. 〜850c. 頃）から、冊子本形式が登場する9世紀半ば以降、つまり帝国崩壊後にかけて作成されていたと想定できる。したがって、サイコロ占卜文献は帝国期から帝国崩壊後の比較的長期間にわたって作成され、支配領域内に広く流通していた占卜文献であり、吐蕃期に最もポピュラーな占卜法であった可能性が高い。

一方で、サイコロ占いはチベット文化圏の各地で今なお実践され続けている占卜法の一つでもあり、早期に入蔵を果たした外国人旅行者や研究者、近年の人類学の調査による観察が多数報告されている。また、大蔵経中に収録される文献をはじめ、サイコロ占いに関連する文献も多く存在する。そこで、本稿では筆者がこれまでに入手したサイコロ占卜文献に関する情報を集約し、資料の分類と分析を第一に行う。次に、筆者自身が西チベットのラダック地方とブータンで行った占いの現地調査結果をまとめ、現代チベット文化圏におけるサイコロ占いの実施状況を検証する。そこから得られた知見を古チベット語文献の内容と対照させ、特に占いの中心となる神格に着目して両者の相違点を検証する。これを通じて占いのシステムとその歴史的変化についても考察を試みたい。

2　現代チベット文化圏におけるサイコロ占い

2.1　概観

チベットの習俗を扱う概説の中で、占いを一つのテーマとして取り上げるものは少なくない。中でもサイコロ占いについての紹介は多く、例えば、Tucciは、著書の民間信仰に関する章の中で、未来の出来事を予知する一般的な手段

としてサイコロ（*sho*）を使用する方法をあげている。Tucci はこの占卜法について、ペルデン・ラモ・マクゾルマ（Dpal ldan lha mo, dmag zor ma）をはじめとする仏教の代表的神格の後ろ盾のもとで行われていることを指摘する一方で、「古くからある土着の慣習をよく知られた仏教の神格が継承したものだ」と述べている[2]。

ラマ・チメ・ラダ・リンポチェによるチベットの占いに関する概説中には、ビジョンによる占い、矢占い、バターランプによる占い、鴉の声による占いに並んで、サイコロ占いについての言及がみられる。そこでは 3 つ一組のサイコロを一度振り、目数の総数（3 ～18）を手引書に照らすことで吉凶が判断される。占いの守護神は、やはりペルデン・ラモであり、よく知られた手引書はダライ・ラマ 2 世として知られるゲンドゥン・ギャムツォ（Dge ‘dun rgya mtsho: 1475–1542）の著作であると述べられる[3]。Waddel はペルデン・ラモによるものと併せて文殊菩薩に関連するサイコロ占いを紹介している。ここで使用されるサイコロの各面には文殊菩薩の真言（*oṃ arapacana dhīḥ*）を表す *a*、*ra*、*pa*、*tsa*、*na*、*di* の六字が割り当てられており、振り出した文字によって卦辞が得られるという。例えば、*a* が出た場合には「大僧侶や役人にとって大変良い卦であって、為すこと全てがうまくいく。一般の身分の低い人々には凶事が起こるので自身の信心する神を崇拝しなくてはならない」という総評に続いて、家庭・成功・命・健康・敵・訪問者・旅行・失せ物に関する個別の吉凶解説が述べられている。ペルデン・ラモのサイコロ占いに用いられるサイコロが象牙製や骨製であるのに対して、こちらのサイコロは文殊菩薩の神魂樹や白檀あるいは紫檀、そのどれもがない場合には法螺貝から作られると報告されている[4]。また、文殊菩薩のほかに、観音菩薩の六字真言が刻まれたサイコロを用いるものもある[5]。

以上で報告されるサイコロ占いは、ペルデン・ラモや文殊菩薩、観音菩薩といった仏教の神格に依拠するものであった。一方、ボン教の占卜法を紹介した中にもサイコロ占いに関する記述がある。例えば、Namkhai Norbu はボン教で行われる 2 種類のサイコロ占卜法を紹介している。第一は、神と魔の双方を表象する白・黒 2 つのサイコロを同時に投じて行うものである。神のサイコロは

---

[2] Tucci（1980：203）。
[3] Loewe & Blacker（1981：8, 17–18）。
[4] Waddel（1974：470–473）。
[5] 才让（1999：168–170）。

ガラスや水晶、貝といった白色の物質から作製され、魔の方は黒色の石や木によって作られる[6]。第二は、六面に文字の記されたサイコロ 1 つを投じる方法である。おそらく前述の文殊菩薩のものに類すると考えられるが、Namkhai Norbu はサイコロに描かれる文字と神格の関係には規則性がないとして拠り所となる神格名を明記していない。彼によれば、この占卜法は古代からシャンシュンでもチベットでもよく知られたものであり、今でもボン教徒や仏教徒の間で人気の高い占卜法である[7]。

以上をまとめると現代のチベット文化圏で行なわれている主なサイコロ占卜法は以下の 3 タイプに大別できる。

用いるサイコロの数	投賽回数	卦辞の総数	代表的依拠尊
3	1	16	ペルデン・ラモ
2	1	11	不明／ペルデン・ラモ[8]
1	1	6	文殊菩薩、観音菩薩

2.2　占卜書の類型

上でみたサイコロ占卜法のうち、ペルデン・ラモに依拠するものについては、手引書の存在がたびたび示唆されている。たとえば、チベットの信仰と民俗に関する概説書の中で、才譲はサイコロ占いの風習が現在でもチベット各地に伝わっているだけでなく、仏教の大僧侶たちによる占卜書がこれまでにいくつも執筆されてきたことを指摘し、比較的著名な占卜書として、18世紀から19世紀の著作である以下の 4 文献を紹介している[9]。

---

[6] このサイコロ占いに見える二元対立は、悪魔祓いの儀式で行われるサイコロ勝負を想起させる。新年に大昭寺で実施されていた身代わりの儀式（*glud ‘gong*）では、ダライ・ラマに扮した僧侶と魔王に扮した民衆の代表がサイコロの勝負を行う。その際使用されるサイコロには必ず僧侶のサイコロが勝利するよう細工が施されており、勝負に負けた魔王は、人々の災禍とともに遠方へ放逐される（山口，1987：316–318、Nebesky-Wojkowitz, 1993：508–511、スタン，1993：260–262など）。

[7] Namkhai Norbu（2013：202–203）。

[8] 次節でみるように二つのサイコロを用いる占卜法は仏教にもあり、そこではペルデン・ラモを依拠尊としている。

[9] 才让（1999：166）。また、才譲は、その他にも著名な大学者である博東哇・喬勒南傑（1306–1386）の文集目録中にも、「擲骰子之占算」というサイコロ占卜書の名前が発見できることを指摘している。この著者は Bo dong phyogs las rnam rgyal（1376–1451）を指すのかもしれないが、生没年が一致しない。

(a) 吉上天女退敵勝母之骰子占卜注解（久熱・阿旺成勒：18世紀末–19世紀初）
(b) 依吉祥退敵勝母之骰子占法・普現明鏡（嘉様官却久美旺吾、為拉卜楞寺嘉木様第二世：1728–1791）
(c) 依吉祥天女擲骰占卜法（央金珠白多傑：1809–1887）
(d) 依吉祥天女擲骰占卜法（阿旺益西図丹）

概説書という性格上、才讓の報告中には個々の手引書の内容や相互の異同については言及されておらず、その概要を把握することができない。さらに、原題や著者名がチベット語で明記されていないため、原本を同定し難いという問題もある。しかしながら、筆者の手元にあるサイコロ占卜文献中には、上記の４文献に相当すると考えられるものが含まれている。そこで、以下では現在までに入手したサイコロ占卜書の概要を述べつつそれらの相互関係を整理してみたい。入手したテキストはいずれも版本であり、次の６文献に集約できる。

(1) Dpal ldan dmag zor rgyal mo'i sgo nas rno mthong sgrub tshul de'i 'bras bshad dang bcas pa
(2) Dpal ldan lha mo la brten nas sho mo 'debs tshul nor bu'i me long
(3) Dpal ldan dmag zor ma'i sgo nas sho brtag tshul kun gsal me long
(4) ^A phyi chos kyi sgrol ma'i sho mo snang gsal ba'i me long
(5) Dpal ldan lha mo'i sho ril dkar nag la kha brten pa'i zhi ba'i las tshogs rno mthong sgrub tshul gyi man ngag sgron me zla ba gsar pa
(6) Mo rtsis

テキスト（1）

本書は、多田等観将来東北大学収蔵西藏文書コレクション所収の文献である[10]。同テキストは、TBRC の所有する「種々の占卜書」（Mo dpe sna tshogs）にも収録されており、類似するテキストが後述する「占卜集成書」（Mo dpe phyogs bsgrigs）に発見できる[11]。また本書は、中央チベット（ラサ）や西チベット（ラ

[10] No. 6915。カタログには「吉祥鎌刀妃の門による占術成就法並びにその成果の釋」という邦訳タイトルが付されている（Kanakura *et al*. 1953：499）。

[11] Tibetan Buddhist Resource Center（TBRC）は、チベット仏教文献やチベットの伝統的な著作などをデジタルイメージにして広く活用できるようにしている（http://www.tbrc.org/）。筆者の入手した「種々の占卜書」'Phrul mo sna tshogs phan bde'i 'byung gnas あるいは Mo dpe sna tshogs（volume serial 0882）という占卜書も、当ウェブサイトより入手したものである。ここには、ペルデン・ラモのサイコロ占い以外にも、暦占や数珠占い、ビジョンによる占い、泥棒の同定に関する占い、生まれてくる子の性別を見分ける占いなど多種多様な占卜法が収録されている。

ダック）の露天などでも入手が可能なことからは、おそらく現在最も流通しているサイコロ占卜書であると推定できる[12]。奥書に、「全知の人、ゲンドゥン・ギャムツォによってなされたサイコロ占い（*thams cad mkhyen pa dge 'dun rgya mtshos mdzad pa'i sho mo*）」とあるので、本書が第 1 節でみたラマ・チメ・ラダ・リンポチェの言及するサイコロ占卜書に相当することがわかる。同じく、奥書には、本書の著者としてチャクラ・チョージェー・ンガクワン（Lcags ra chos rje ngag dbang）という名前が述べられていることから判断して、本テキストは才讓の紹介する（a）本に同定できるだろう[13]。

本書には、以下の占卜書と同じく、サイコロ占いを実施する際に観想すべき神々の名前や、その真言が記された導入部があるほか、各卦辞には、凶事を払拭するための仏教的処置が詳細に指示されている。山田によれば、そこには27種類の神々や魔物の名前と23種類の祓いの儀式、33種類の病名が言及されており、招福除災などに役立つ64種類の経典が総計305回登場する。災いや凶事、病の原因としては、生まれ年の悪さや魔物・生霊による障害、自然神への不敬な振舞いなどがあげられ、対抗手段として種々の経典の読誦や供物の奉納、献香、家畜の放生、祈祷旗の掲揚といった仏教的善行の実践が指示されている[14]。

テキスト（2）

本書は、テキスト（1）と同じく、多田等観将来東北大学収蔵西藏文書コレクションに収められるサイコロ占卜書である[15]。語彙や文章が省略されている箇所が目立つものの、卦辞の記述や結果にはテキスト（1）との符合がみられた。したがって、本書はテキスト（1）の抄録本と位置づけられる。奥書にも、「ノルペルとテンジンの二人が、最初の占卜書から教言を［抜粋して］自ら整

---

[12] 国立民族学博物館図書館にもラサで印刷されたものが所蔵されている。また、インド、ネパール、ブータンなどで復刻出版されたチベット語文献を収集するアメリカ合衆国のプロジェクト（PL480）で作成された文献のマイクロフィッシュにもダラムサラで印刷された同タイトルの占卜書が収められている（Set 7-34. LMpj-013876. SB-3962. LCCN-79-905765）。

[13] テキスト（1）に属する大多数の占卜書では、チャクラ・チョージェー・ンガクワン・ペルデン（Lcag ra chos rje ngag dbang dpal ldan）という著者名が記されているが、「占卜集成書」（Mo dpe phyogs bsgrigs）にはチャクラ・チョージェー・ンガクワン・ティンレー（Lcag ra chos rje ngag dbang 'phrin las）と記される。才讓の（a）にみえる著者名は後者に符合すると考えられる。

[14] 山田 2009：220–224.『パルダンラモに従い未来を見通す力を取得する方法』という邦題が付されていることから、山田が考察対象としたテキストはテキスト（1）に相当すると考えられる（山田 2009：217）。

[15] No.6471（吉祥天女に依る占ひの賽を投ずる方法、“摩尼鏡”）（Kanakura *et al*. 1953: 407）。

理して作成したもの（*nor ‘phal dang brtan ‘jin*[16] *gnyas*[17] *kyi*[18] *dang po’i ma*[19] *dpe nas lungs*[20] *dang byas nas rang bshams bgyis pa*）」とあることからも本書はテキスト（1）の抄録本と考えられる。

テキスト（3）

本書は、筆者自身が2013年 8 月に青海省共和県の書店で入手した「占卜集成書」に収録されるサイコロ占卜書である。上述のように、ここにはテキスト（1）に類する占卜書が収められているほか、第 1 節で言及した観音菩薩に由来するサイコロ占卜書（Yi ge drug ma’i mo yig blang dor gsal me）も含まれている[21]。しかし、一見して明らかなように、本書の内容はテキスト（1）とは大きく異なる。第一に、テキスト（1）では各卦辞の冒頭に「総じて、この卦は大変よい」（*lar mo di’ shin tu bzang*）といった総評が記されるが、本書にはその記述がない。また、凶事を祓うための仏教的措置についても、（1）ほど詳細には指示されていない。さらに、本書の卦辞はいずれも簡潔で短く、（1）には含まれない生まれ年の干支による吉凶が記されているほか、全体が 7 音節の韻文で構成されている点でもテキスト（1）との間に大きな相違がみられる。それにもかかわらず、各卦辞の吉凶には概ね（1）との符合が看取できる。したがって、テキスト（3）は、（1）、（2）とは別系統の占卜書に属すると考えられるが、目と吉凶の関係やペルデン・ラモに依拠する点ではテキスト（1）、（2）との共通性がみられると言える。ところで、本テキストと同タイトルの文献が、ラプラン寺の第 2 代ジャムヤン・シェーパであるコンチョク・ジグメ・ワンポの全集に収録されている[22]。したがって、テキスト（3）は、才讓の紹介する（b）本に符合すると考えて良いだろう。

---

16 *‘jin*: *‘dzin* の誤写と思われる。

17 *gnyas*: *gnyis* の誤写と思われる。

18 *kyi*: *kyis* であると考えた。

19 *ma*: *mo* の誤写と思われる。

20 *lungs*: *lung ‘dren pa* であると考えた。

21 本書には、著者がドンクン・ドゥプパ（Don kun grub pa）であるということ以外には、書誌情報が全く記されていない。3 種類のサイコロ占卜書と並んで、小石（*sho rde’u*）を使った占いや、数珠占いの手引書が収録されている。そのほか、ボン教に伝わるとされる予兆集には、目や耳、鼻などの身体の一部が痒い、犬が侵入した、カササギの鳴き声を聞いた等の事象から読みとる予兆が収録されている。

22 Dkon mchog ‘jigs med dbang po: 1728–1791。全集は Ngawang gelek demo によって1971年にニューデリーで出版されており、件の占卜書は、その vol.10に収録されている。

テキスト（4）

本書は、タイトルに明示されているようにアチ・チョーキ・ドルマ（^A phyi chos kyi sgrol ma）に依るサイコロ占卜書である。これは、筆者自身がラダックのディグン派寺院、スクルブチェン・ゴンパにて入手したものである。内容を吟味したところ、神仏の観想法や神への賛辞、唱えるべき真言などを記した導入部がテキスト（1）とは異なっていた。しかし、両者の卦辞の記述内容には一致がみられる。奥書には、「コンチョク・ティンレー・サンポが編纂したのである（*dkon mchog 'phrin las bzang pos sbyar ba'o*）」とあることから、第二代チェ・ツァン・リンポチェ（*che tshang rin po che*）であったコンチョク・ティンレー・サンポの手によるものであるとわかる[23]。ディグン派の寺院では、自派の護法女尊であるアチ・チョーキ・ドルマのもとに占いが実施されるため、状況に適うテキストが必要とされたのであろう。したがって、テキストの系統としては、本書もテキスト（1）と同系統に属すると考えられる。

テキスト（5）

本書は、TBRC が保有する洋装本形式の占卜書である[24]。タイトルから明らかなように、テキスト（1）、（2）、（3）と同じくペルデン・ラモに依拠する占いであるが、本書には 2 ～12までの目に与えられた11種類の結果しか記されていない。つまり、ここに収録されるのは 2 つのサイコロを用いた占いである。また、全体を通して卦辞が 8 音節の韻文で構成されていることから、本書は占卜法、卦辞内容ともに上記のテキスト（1）～（4）とは異なる系統に属するものであると言える[25]。ところで、上述の「占卜集成書」には、サイコロの目がうたれた白、黒二つの小石を用いて行う占いが掲載されており、そこには本書と同様に11通りの結果が記されている。したがって、Namkhai Norbu が伝えるボン教の占いと同じく、仏教の護法神に依るサイコロ占いの中にも、サイコロ 2

---

[23] Dkon mchog 'phrin las bzang po: 1656−1718。

[24] volume number 2549、work number 23729。

[25] テキスト（5）の奥書には、編者として、ヨーガ行者であるカージョル・デデン・ワンモ（Mkha' spyor bde ldan dbang mo）の名前が記されているが、これと同一名をもつテキストが PL 480中にも見つかる（Set 6-33. LMpj-013796. SB-3756. LCCN-79-903066）。そのタイトル（Dpal ldan lha mo dmag dang zor gyi rgyal mo'i sho khram nad rkyal mtshon gru byad dmar gyi las tshogs lnga'i nang nas sho dkar nag la brten nas rno mthong sgrub tshul gyi gdams pa sngon med zla ba gsar pa）の後半部分には、テキスト（5）のタイトルとの一致がみえることから、これもテキスト（5）と同類、ないし同一のテキストであると思われる。

つを用いて行うタイプの占卜法が認められる。

テキスト（6）

本書は、チベット大蔵経テンギュル部に収録されるサイコロ占卜書である[26]。Mo rtsis、サンスクリットでは *ke ba li*（Kevalī）と冒頭に明記されていることから、本書はサンスクリット本の翻訳であると判断できる。本書では、サイコロの目が ^*a*、*wa*、*ya*、*da* という文字によって表されており、この内の 3 つの組み合わせ如何によって卦辞が導きだされる。その際、組み合わせの順序も考慮されるため、64通りの結果が生じることになる。このような状況から考えて、本書で言及される占いは、その四面に文字の記された棒状サイコロ 1 つを 3 度振ることによって吉凶を占うものである可能性が高い。

ところで、インドには古代に起源をもち、現代にまで継承されている Pāśakakevalī というサイコロ占卜書が存在する[27]。そこでは、1 ～ 4 までの目を持つサイコロ 1 つを三度投じることによって、64通りの卦辞を導き出している。書名の一部と占卜法に一致がみられることから考えて、テキスト（6）は、インドの Pāśakakevalī に由来するものである可能性が高い。

本書は、占卜の由緒や次第、唱えるべき真言を記した導入部および卦辞がテキスト（1）～（5）に比べて非常に簡潔である。また、全ての卦辞が「あぁ、尋ねるものよ、聞くが良い」（*kye dri ba bo nyon cig*）という定型表現から始まるという書式的特徴を有する。さらに、総合的な吉凶が明記されず、除災のための仏教的儀礼も指示されていない点でもテキスト（1）～（5）とは大きく異な

---

[26] 北京版 5814, bzo rig pa, go 98a1-103b7、ナルタン版 go 116a1-122a5。

[27] サイコロ占いに関するサンスクリット文献のうち、最古の資料と考えられるのは Bower Manuscript であろう。これは、1890年に Lieutenant H. Bower によってクチャ（Kucā）の地元民から買い上げられたもので、白樺の樹皮にサンスクリット（グプタ文字）で記された貝葉式の文献である。現在はイギリス・オックスフォード大学の Bodleian Library に所蔵されている。書写年代は研究者によって予測が異なるものの、4 世紀から 6 世紀の間とされているため、中央アジア出土の古チベット語文献に先行すると言える（Bower Manuscript の年代については、Hoernle 1891、Bühler 1891：309、Filliozat 1953：157、675–676、Dani 1963：151、Sander 1987：320–321などに詳しい）。Bower Manuscript は、7 つの文献（I–VII）から構成されており、そのうちの IV と V にサイコロ占いの短い手引き書が収録されている。詳細は、Hoernle 1891、1893を参照されたい。なお、紙面の都合上、ここでは Pāśakakevalī の内容や系譜については立ち入らないが、Weber の研究にはベルリンに所蔵される Pāśakakevalī の全訳が提示されている（Weber 1859）。そのほか、Hoernle は、17世紀～20世紀の著作とされる Pāśakakevalī の校訂本 7 本を Bower Manuscript と比較し、Bower Manuscript が Pāśakakevalī の系譜本の一つであると論じている（Hoernle 1893：215、216–221）。古代インドのサイコロ遊戯については Lüders の研究に詳しい（Lüders 1907）。

る。したがって、本書はテキスト（1）〜（5）とは別系譜に属するもので、インドのサイコロ占卜書の伝統に準じた典籍であると考えられる[28]。

以上より、テキスト（1）、（2）、（4）は同系統に属することがわかった。テキスト（3）には、それらとの間に明確な文献的相違が認められる一方で、依拠尊や吉凶には一貫性がみられた。またテキスト（5）は、占卜法や記述内容からみて異なる系譜の典籍であると考えられるが、ペルデン・ラモに依拠する点では他と共通していた。そして大蔵経に収録されるテキスト（6）は、おそらくインドのサイコロ占卜書の伝統を保持したものであり、簡潔な内容をもつ全く独立した系譜の占卜書であった。

2.3　占いの実施状況

次に、現代チベット文化圏におけるサイコロ占いの実施状況について、筆者が2013年 2 月にラダックで行った現地調査による知見をまとめる。現在、ラダックの寺院で実施されているサイコロ占いは、上記テキスト（1）又は（4）に依拠している。上述の通り、テキスト（1）はチベット文化圏に最も流通するサイコロ占卜書であり、本テキストを使用する地域では、共通する占いの実施状況が観察される可能性が高いと考えられる。そこで、以下では、現代チベット文化圏におけるサイコロ占いについて、ラダックの事例を検証材料にして考察する。

ラダック地方は、ザンスカル、バルティスタンとともにチベット語系話者が住む地域で、古くから西チベットと呼ばれてきた。現在の行政区分では、インドのジャンム・カシミール州に属する。筆者は、この地域に約 3 週間滞在して、寺院で行われるサイコロ占いの状況調査や、使用される手引き書の収集を行った。冬期の調査であったため、多くの寺院では占いの知識を持つ僧侶が不在であったが、サイコロ占いを行うことができる 5 人の僧侶から有益な情報を得ることができた。調査対象者は、チャンタン高原出身で現在はチョグラムサルのチベット難民キャンプに在住するドゥク派の僧侶、ドゥク派のスタクナ・ゴンパの僧侶、サキャ派のマト・ゴンパの僧侶、ディグン派のラマユル・ゴンパの僧侶、同じくディグン派のスクルブチェン・ゴンパの僧侶の 5 名である。

---

[28] 後述するように、古代チベットで行われていたサイコロ占いもまた四つ目の棒状サイコロを三度投じる占卜法を採用していた。しかしテキスト（5）との間には内容や書式にみられる共通性が乏しいため、両者には直接的な相互借用関係はないと考えられる。

彼らからの情報によれば、占いを修得している僧侶は、一般に高位の僧侶であり、占卜法は儀式、儀礼を通じて座主から直接伝授されることが多い。占いに先じては、五感および心を清浄に保ち、神々を観想する。そのための修行も必要とされるため、実際にサイコロ占いを実践できる僧侶は1つの寺に1〜2名しか存在しないということであった。また、ある僧侶によれば、占いに使用されるサイコロは、占いの度にツァルマと呼ばれる棘のある木から作られ、それが収められた箱の面前で守護尊を一週間観想することによって特別な状態に仕上げられる。別の僧侶によれば、サイコロは他人が触れることによって負の力を受けると考えられているため、各僧侶が個人的に管理するという。実際の占いの場では、僧侶はサイコロを手中に握りしめて守護尊を観想し、真言を唱えた上で神に相談者の名を告げる。そして、相談者には見えないようにサイコロを投じ、結果を確かめる。したがって、病気の治癒や家畜の捜索などの相談を目的に訪れた相談者がサイコロを直接目にすることはない。伝統的には血の汚れを持つ女性は相談者になり得なかったという情報も得られた。また、凶兆の場合は、二度まで振り直しが許されるが、結果が悪ければ適切な儀礼を行えば良いため、再投する必要はないと考えられている。テキストに関しては、ディグン派では上掲のテキスト（4）が使用されるのが一般的だが、実際のところは、ディグン派でも簡便で効力も強大であるとされるテキスト（1）を使用することが多いということであった。

3　ブータンにおけるサイコロ占い

3.1　概観

筆者が2009年と2011年に実施した調査によれば、ブータンにおけるサイコロ占いの実施状況や使用されるテキストは前章で紹介したラダックの場合とは大きく異なる。そこで、本章ではブータンの事例について知見をまとめる。

ブータンのサイコロ占いに関しては、報告や先行研究にあたるものが非常に少ないが、National Geographic Magazin 上に発表された Todd の報告には、彼がブータン西部に位置するタクツァン寺院で体験したサイコロ占いの様子が伝えられている。それによれば、タクツァン寺院に祀られるハ谷の土着神 App Chungdu 像の前には、占いに用いる3つのサイコロが載せられた革製の小さな盆が置かれており、彼がそれを振ってみたところ、最初に出た5という目はその寺の僧侶の顔を曇らせたが、次に出た11の目は良い結果であった。この占い

は、ブータン各地の寺院に伝わるものであるという。彼の得たサイコロの目数から考えて、これが 1 ～ 6 までの目を持つサイコロ 3 つを一斉に投じるタイプの占いであることは間違いない。

筆者が2009年に実施した調査によっても、寺院では護法神を祀った護法堂や本尊の御前にサイコロが安置され、参拝者の要望に応じて随時占いが実施されることが確認できた。お布施と引き換えに盆から取り上げたサイコロを手中に握りしめ、心に悩み事を念じる。そして盆の上にサイコロを振りだすと、僧侶が即座に吉凶を告げてくれるのである。相談者が男性の場合には護法神の御前で占いを行えるが、女性の場合には僧侶が護法堂から持ち出してくれたサイコロを本尊の御前などで振ることになる。相談者に吉凶を告げる際、僧侶が手引書の類を参照する場面は一度も観察されることがなかった。しかし、調査を進めていくうちに、占いを実施する寺院はそれぞれに独自のテキストを保有しており、目数と吉凶の関係や依拠する神格も寺院ごとに異なることがわかってきた。そこで、2011年 3 月に再びブータンを訪れ、西部のパロから中央地域のブムタンに至る26の仏教寺院で調査を行った。その結果、16の寺院においてサイコロ占いが実施されていることが確認できた。このうち、西部に位置する 6 寺院は占卜書を保有していた。しかし、調査日が祭日であったために、パロのチャンサブ・ラカンでは占卜書の入手には至らず、これまでに 5 点の占卜書を入手している。本節では、ブータンのサイコロ占いの概観を示すために、2011年の調査で対象となった寺院の大まかな所在地と名称を地図で示し（地図 1 ）、占いの実施の有無、占卜書の有無、占いの依拠する神格、最良の目数を寺院ごとに一覧表にして提示する（表 1 ）。

地図 1　ブータンのサイコロ占い調査地域と寺院名

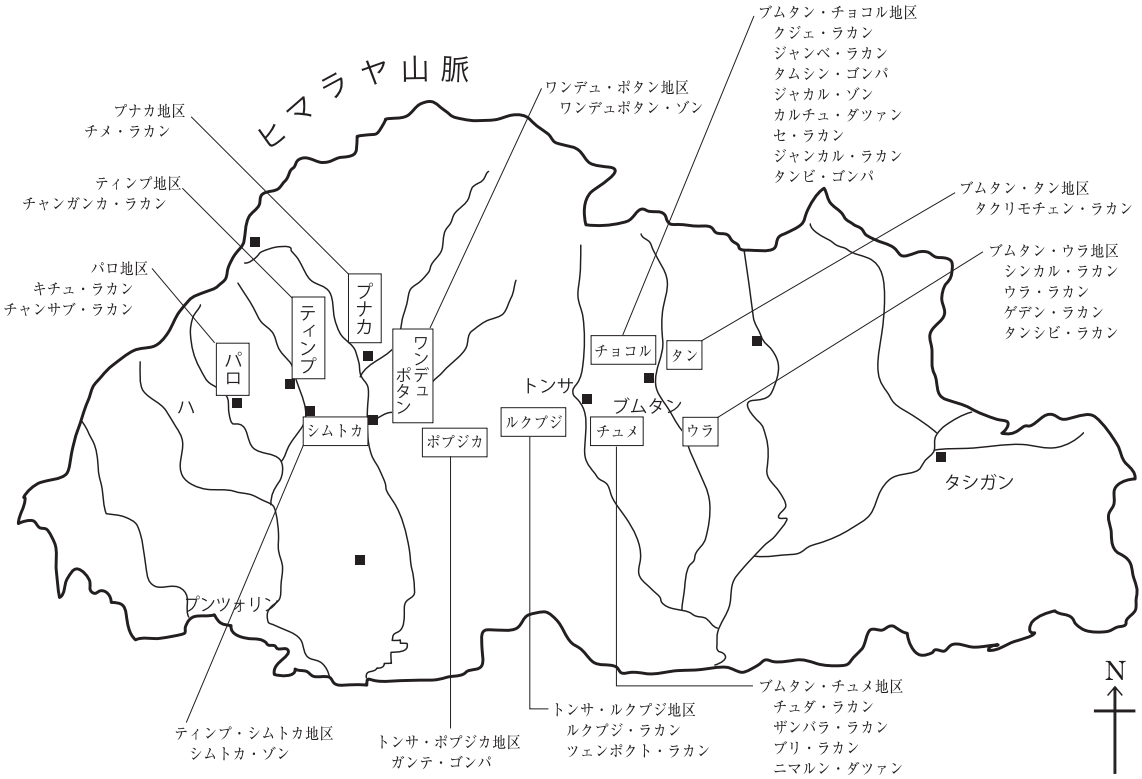

表 1　ブータンのサイコロ占い調査リスト

地域	寺院名	占い	占卜書	依拠尊	最良の数
パロ	キチュ・ラカン	有	無	Pe har	8
	チャンサブ・ラカン	有	有[29]	Ye shes mgon po	14
ティンプ	チャンガンカ・ラカン	有		Rta mgrin / Gdom tshang	11
シムトカ	シムトカ・ゾン	有		Ye shes mgon po	9
プナカ	チメ・ラカン (a)	有		‘Brug pa kun legs	13
	チメ・ラカン (b)[30]	有	無	Chos kyi ma（/Chos kyim）	5

[29] 上述のように、この寺の保有する占卜書は未確認である。

[30] チメ・ラカンでは、二種類のサイコロ占いが実施されていた。一方はサイコロ 3 つを用いた占いであり、ドゥクパ・クンレーに依拠していた（チメ・ラカン（a））。他方は Chos kyi ma（ブータンの発音では Chos kyim）のサイコロと呼ばれるサイコロ 1 つを用いる占いであった（チメ・ラカン（b））。後者は、寺の守り神とされる女神、Chos kyi ma の立像の御前で実施される。しかし次節で見るように、実際には、(a) もまた Chos kyi ma に依拠する占いであることがテキストのタイトルに明示されている。

ワンデュ	ワンデュポタン・ゾン（a）	有		Zhabs drung	11
	ワンデュポタン・ゾン（b）	有		Mgon po	9
ポプジカ	ガンテ・ゴンパ	無			
ルクプジ	ルクプジ・ラカン	無			
	ツェンポクト・ラカン	有	無	Dra ma pe za（?）	11
チュメ	チュダ・ラカン	有	無	G.yu sgrol ma	9
	ザンバラ・ラカン	無			
	ブリ・ラカン	有	無	Mgon po ma ning	9
	ニマルン・ダツァン	無			
チョコル	クジェ・ラカン	有	無	Shel ging dkar po[31]	10
	ジャンベ・ラカン	有	無	Dpal ldan lha mo	13
	タムシン・ゴンパ	無			
	カルチュ・ダツァン	無			
	セ・ラカン	有	無	Dpal ldan lha mo	3 、 5
	ジャンカル・ラカン	有	無	Dpal ldan lha mo	13
				Skyes bu lung btsan[32]	3 、 5
	タンビ・ゴンパ	無			
タン	タクリモチェン・ラカン	有	無	Lha mo Rematī[33] / Zo ra ra skyes[34]	10
ウラ	シンカル・ラカン	無			
	ウラ・ラカン	無			
	ゲデン・ラカン	無			
	タンシビ・ラカン	無			

3.2　占卜書の類型

ブータンで入手できた 5 点のサイコロ占卜書は、すべてが写本であった。占卜書に記されたタイトルと、それを保有する寺院は次の通りである。

---

31 シェーギン・カルポ（Shel ging dkar po）は、一般には護法神ペハルの変化相の一つであると考えられているが、ブータンではクジェ・ラカンでパドマ・サンバヴァに調伏された後、その地の埋蔵経典を守るテルダの役割を果たすようになったとされる（Aris 1979: 297–298）。

32 ケープ・ルンツェン（Skyes bu lung btsan）はブムタン地方で最も重要とされるツェン（Btsan）であり、この地の 4 つの谷（チュメ、チョコル、タン、ウラ）の守り神でもある（Aris 1979: 46、今枝 2006： 1 ）。ジャンカル・ラカンの占いではペルデン・ラモとケープ・ルンツェンの両神が依拠尊とされており、それぞれに最良の数が設定されていた。

33 ラモ・レマティ（Lha mo Rematī）は、ペルデン・ラモの変化相とされるカスン・ラモ・ドルジェ・チェンモ（Bka’ srung lha mo rdo rje chen mo）の眷属の一人である（Nebesky-Wojkowitz, 1993: 36）。

34 テルダとされるゾララ・ケー（Zo ra ra skyes）は、タン地方の土地神でもある。

① Sras nyi ma’i gdan sa lcang sgang kha gnas po’i gdom tshang gi mo / be ros mdzad pa’i sho mo gsal ba’i me long（チャンガンカ・ラカン）
② Mngon po’i sho mo gsal ba’i me long（シムトカ・ゾン）
③ Sho yig kun gsal me long zhes bya ba be ro tsa nas mdzad pa（ワンデュポタン・ゾン（a））
④ Dpal ye shes kyi mgon po’i sho mo（ワンデュポタン・ゾン（b））
⑤ Mthong ba chos kyi ma’i sho mo（チメ・ラカン（a））

一見して明らかなように、上記5写本のタイトルには一致がみられない。しかし、記述内容を照査してみると、テキスト②と③は同一典籍に基づくものであることがわかった。ただし、綴り字の差異や語彙の脱落・挿入もみられるため、一方が他方を写したとは考え難い。その上、目数が10の場合には、テキスト②では凶と判断されるが、③では「ペルデン・ラマの目であって（吉）」(*dpal ldan bla ma’i sho skal yin*）と判断されている。したがって、テキストの一方において、粗本となる典籍に改編が加えられていると見ることができる。また、テキスト①〜③は、この占いが著名な大翻訳官ヴァイローチャナ（Be ro tsa na）によって記された占いであることを伝えている。さらに、テキスト⑤は、導入部と奥書が完全に脱落しているものの、卦辞内容は前章で見たペルデン・ラモの占卜書（テキスト（1））に符合することがわかった。

ところで、第2章でみた占卜書の導入部には、観想すべき神々やその真言が記されていたのに対して、ブータンの占卜書ではそれらの記述が欠落しており、短い前文が付されている場合であっても、占卜書の来歴などが簡潔に述べられるにとどまっている。また、テキスト⑤を除く4写本においては、卦辞の記述が大変短く、除災のための仏教的措置も記されていない。文献間の相違を示すために、上記5文献とペルデン・ラモの占卜書（テキスト（1））の吉凶を一覧で示しておく。

表2　ブータンのサイコロ占卜書の吉凶対照表

	テキスト①	テキスト②	テキスト③	テキスト④	テキスト⑤	テキスト（1）
3	bzang	bzang	bzang	bzang	‘bring	‘bring smad tsam
4	ngan	ngan	ngan	‘bring tsam	ngan	ngan tsam
5	bzang	bzang	bzang	bzang	bzang ngo che	bzang ngo che
6	ngan	bzang / ngan	bzang / ngan	ngan ?	ngan	ngan tsam
7	dge	‘bring	‘bring	dges	bzang	bzang ba

8	bzang	bzang	bzang	bzang	‘bring	‘bring stod
9	bzang	bzang	bzang	（shin tu）bzang	bzang bar che	bzang bar mchis
10	ngan	ngan	bzang	shin tu ngan	‘bring tsam	‘bring tsam
11	bzang	bzang	bzang	（shin tu）bzang	bzang	bzang ngo che
12	ngan	ngan	ngan	ngan	shin tu ngan	shin tu ngan
13	bzang	bzang	bzang	shin tu bzang	bzang bar che	bzang bar mchis
14	‘bring	phyi thar che	phyi thar che	shin tu ngan	‘bring smad tsam	‘bring smad tsam
15	bzang	bzang	bzang	bzang	bzang bar shin tu che	bzang bar mchis
16	ngan	bzang / ngan	bzang / ngan	ngan	shin tu ngan	shin tu ngan bar gda’
17	bzang	ngan	ngan	bzang	bzang	shin tu bzang
18	ngan	ngan	ngan	ngan ?	‘bring stod tsam	‘bring stod tsam

3.3　占いの実施状況

ブータンのサイコロ占いに共通して観察されたことは、最良とされる目数が依拠尊に起因する数であると考えられていることであった。最良の数は寺院によって異なるが、３、５、８、９、11、13、14のいずれかであり、どの僧侶に尋ねても大凶とされる数は12であった。６、10、14、18を凶と認める寺院も多くみられたが、10、14に関してはこれらの数を依拠尊の数と認める寺院では大吉と判断されていた。ちなみに、第１章で取り上げたペルデン・ラモの占卜書（テキスト（1））を参照してみたところ、確かに12は大凶であり、５、９、11、13は吉であったが、３、８、10、14は中程度という結果であった。

占いの後ろ盾となる神格としては、ペルデン・ラモやその眷属（Lha mo Rematī）、マハーカラ（Mgon po, Ye shes mgon po）、ペハル（Pe har, Shel ging dkar po）といった仏教の護法神、あるいはドゥクパ・クンレ（’Brug pa kun legs）やシャプドゥン（Zhabs drung）などの神格化した偉人のほか、ケープ・ルンツェン（Skyes bu lung btsan）やゾララ・ケー（Zo ra ra skyes）といった土地神の名も挙げられた。このように、ブータンのサイコロ占いには目数と吉凶に関してはおおよその共通性がみられるが、依拠する神格やそこに起因するとされる最良の目数などには、寺院ごとの独自性が観察できた。

占いに用いられるサイコロは、鹿の角から作製された1.5cm ～ 2 cm 程度のサイコロやその半分程度の大きさの木製ないしプラスチック製のサイコロであった。鹿の角を用いたサイコロには特徴的な空洞が確認できるが、これは髄液を除去したためにできたものであろう。

ここで特記しておきたいのは、第２章でみたラダックの場合とは異なり、ブータンでは、占いに先じて神々を観想し、真言を唱えるような場面は一度と

して観察されなかったということである。さらに、ブータンでは占いを修得するために特別な修行や学習は必要とされず、若い堂守りが吉凶を告げる場面も度々みられた。つまり、ブータンでは占卜法の修得から実践に至るプロセスが明確に規定されていないと言える。しかし、僧侶の間には吉凶に関するおおまかな合意がみられるようであった。

また、ラダックの事例では、サイコロを投じるのは神の判断を導く僧侶の役割であるのに対して、ブータンでは心中に悩みを抱いた相談者自身が投賽を行う。つまり、ブータンのサイコロ占いにおいて僧侶が担う役割は、吉凶を告げることの一点にあると言えよう。調査中には、幼児を連れた母親や年配の女性が占いを行う場面に遭遇することもあった。ここからは、ブータンにおいてサイコロ占いが人々の日常に密着したものであることがうかがえる。実際に、ブータンの人々は、試験の前や車や家といった大きな買い物をする際にもこの占いを行い、買い物をするのに相応しくない卦が出れば、良い卦がでるまで購入を延期するという。しかし、手軽で身近な占卜法である一方で、効力には信頼が寄せられているため、悪い結果を恐れて占いを避ける人もみられた。

以上から判断して、ブータンのサイコロ占いは、非常に簡便であるという特徴を持ちながら、土地や人々の生活に密着した占いであるとまとめることができる。筆者の調査中には、病いの原因特定のために占いを申し込む相談者や、凶事に対する仏教的対処法を指示される相談者に遭遇することはなかった。この一因としては、ペルデン・ラモのサイコロ占卜書のように高度に仏教化した手引書がブータンでは使用されないことが考えられるだろう。

写真 1　鹿の角製のサイコロ

写真 2　木製のサイコロ

4　サイコロ占いにおける神格

以上のような資料状況から考えて、現代チベット文化圏で最も知られるサイコロ占卜法は、ペルデン・ラモという仏教の護法神に依拠する占いであると言える。ペルデン・ラモは、ゲルク派の主要な護法神であり、その変化相の一つであるマチク・ペルデン・ラモ（Ma gcig dpal ldan lha mo）は、ラサの守護神でもある。また他の変化相の 1 つは、 2 つ一組のサイコロを腰から下げた姿で描写されるペルデン・マクゾル・ギェルモあるいはペルデン・マクゾルモである[35]。Tucci によれば、ペルデン・ラモは、名称上はインドの Śrī-devī と一致するものの、様々なチベットの土地神を融合して発展した結果、彼女の仏教的外装の下には原始ボン教の知識が吸収されているという[36]。ラダックでは、ゲルク派以外の宗派であっても、サイコロ占いを実践する際には、ペルデン・ラモを拠り所としていることが観察された。一方で、ブータンでは、仏教の護法神のみならず神格化された偉人や各地の土着神が占いの後ろ盾として必要とされていた。では、両事例に示された相違は、何に起因するのであろうか。以下では、地域の共同体と土地神との関係性に着目してみたい。

ユラ（*yul lha*）やシダ（*gzhi bdag*）といった土地神には、特定の山や湖、樹木等の自然と同一視されるものやそれらを住処とするもの、あるいはその地へ最初に入植した氏族の氏神（*pho lha*）から転じたものなどがある[37]。ほかにも、共同体にとって重要であった人物の霊魂もその守護神となることが報告されている。例えば、アムド地方の土地神の中には、漢民族の武将の霊魂に由来するものがあるという[38]。これらの多くが高僧に調伏されるという通過儀礼を経て仏教に統合されていく。土地神は、管轄下の住民の生活や共同体の安寧、農作を保証してくれる守り神であり、一定の団結力と自立性を持つ共同体は土地神から権力を与えられた長によって統括されてきた。ところが、ラダックで祀られるユラの多くは高僧に付随して到来したとされる神々であり、特定の自然とは関連をもたないという。Dolfus は、中央集権の長い歴史によって共同体が自立性を失い、村や村人と土地神の関連性が希薄になった結果として、ラダック

---

[35] Nebesky-Wojkowitz（1993：22–31）。
[36] Tucci（1980：590–591）。
[37] Blondeau and Steinkeller（eds.）（1996：vi–xi）。
[38] 別所 2004。

では仏教的文脈を持つ超域的なユラが必要とされるようになったと分析し、地域の神々への信仰は共同体の歴史や生活様式によって変容、多様化すると論じている[39]。

さらに近年、ラダックのユラのもっていた機能は、より汎用性の高い神々へと置換されつつあることが報告されている。山田は、1990年と2003年に実施した調査を通して、ラダックのシャーマンに憑依する神がユラから高位の仏教的神格へと移行していることを指摘し、「ラダッキの伝統の汎チベット化がはじまっている」と述べている。この背景としては、ラダックにおいて地域に根ざした固有の実践であったシャーマニズムがトランスカルチュアルな実践へと変わりつつある中で、共同体を同じくしないラダック人やチベット難民のみならず、ムスリムやツーリストといった他宗教を信じる外国人にも対処すべく、村のユラに代わって、より一般的で普遍的な仏教の神々が選択されるようになってきたという状況が想定される。このようなシャーマニズムの観光資源化に加えて、チベット難民や彼らとともに移入した神々の存在、現代化に伴う首都レーへの人口の移動といった要因が「汎チベット化」を促進する原動力となっていることが指摘されている[40]。本稿で扱ったサイコロ占いについても、ラダックではテキスト（1）ないしそのヴァリアント本に位置付けられるテキスト（4）に依拠する占いが仏教儀礼に準じた実践方法によって行われていた。山田の分析に従えば、拠り所が「汎チベット」的な神々であることによって、多様な文化背景に対応できる占いとして機能することが可能となったとみることができるだろう。

一方、ブータンの占いの実施状況やテキストの多様性は、依拠尊が汎チベット的神格へと移行する過渡期にあること示唆しているのではないだろうか。ブータンでは、占いの拠り所としてペルデン・ラモやマハーカラといった汎仏教的神格のみならず、シャプドゥン、ドゥクパ・クンレといったブータン固有の神格化した偉人や、各地の土地神が機能している。ラダックの事例に照らせば、村人と土地神の関係が存続しており、共同体が未だ土地神の管轄下にあるため、占いにも土地神が必要とされていると考えることができるだろう。事実、ブムタン地方の土地神であるケープ・ルンツェンに対する法要は、現在でも寺院や個人宅にて定期的に営まれており、常設の立派なお堂も建立されてい

[39] Dolfus（1996：14–15）。
[40] 山田（2009：389–395）。

る。ドム・ツァンやゾララ・ケーに対しても、年に一度の祭礼が執行されている。これらは、本来、仏教とは何ら関連性を持たない土地神と共同体の間で取り交わされる土着的な儀礼であったものが、その執行者とプロセスが仏教的文脈で再解釈されつつ現代にまで継承されたものと捉えることができるだろう。本稿で扱った占いも、本来は共同体を管轄する土地神の掌握するところであったものが、一部では、汎仏教的神格に置き換えられていると理解できる。神格化した偉人に依拠する例は、汎ブータン的な移行がなされた結果と考えられるのではないだろうか。

一方、このような汎仏教的、汎ブータン的な神格への移行がなされる背景には、ブータン仏教の一元化への動きが影響している可能性がある。宮本によれば、ブータン仏教界の長であるトゥルク・ジグメ・チョダ（在任1996年〜）が精力的に進める仏教界の近代化の中で、各村落で管理されてきた仏教寺院に対しても新たな取り組みが始まったという。村の各寺院は、集約的な登録システムの中に組み入れられ、そこには中央僧院または県僧院から僧侶が派遣される。宮本は、「この動きは、個々の村落社会における信仰世界のありようを少しずつ変容させ」、「共同体の外部から派遣された権威ある出家僧たちは、自然神への信仰や、パウやジョモといった土着の呪術師たちによる宗教実践への信頼等が混然一体となったブータンの信仰世界を、「正しい仏教」の教えによって一元化することに大きな力を発揮しつつある」と指摘する[41]。この取り組みによって、村人に「正しい仏教」が浸透することにより、シャーマンたちの憑依させる神々や占いを管轄する神々にも、より高位の仏教的神格への転換、一元化が起こる可能性があるのではないだろうか。本稿でみたブータンにおける占いの依拠尊にも近い将来、転換期が訪れるかもしれない。

以上より、チベット文化圏のサイコロ占いにおける依拠尊には、占いが実践される地域において最も影響力のある神格が選ばれているとまとめることができる。「汎チベット化」の進むラダックでは、汎仏教的なペルデン・ラモが選ばれ、ブータンの一部地域では各地の土地神が村人の命運を掌握し、村人の心身に調和や不調和をもたらす機能を保持していた。しかし、共同体外部との接触や人口の移動、生活様式の画一化にともない地域社会と土地神との関係性に変容が生じた場合には、選択される依拠尊が変化していく可能性がある。したがって、占いの依拠尊は、それの実践される地域と時代の両観点から最も影響

[41] 宮本（2014：79）。

力のある神格が選ばれていると判断できる。

5　おわりに

本稿では、現代チベット文化圏のサイコロ占いおよびサイコロ占卜書についての検討を行った。現代チベット文化圏に最も流布していると考えられるペルデン・ラモの占卜書では、災厄に対する仏教的対処法が非常に発達していた。ラダックにおいてこの占卜書に従って占いを実践する者は、心と五感を清浄に保ち、真言を唱えつつ観想した神を占いの場へと召喚する。ここに用いられるサイコロもまた、仏教儀礼を通じて周到に準備された特別なサイコロであった。占卜技術は座主から高僧へ直接伝授され、その修得には瞑想修行が必要とされる。ここからは、サイコロ占いが仏教儀礼の一部として十分に昇華されている様子がうかがえる。一方で、ブータンでは占卜技術の修得、実践、占卜書の内容に至る全ての面において非常に簡便化された占いの状況が看取できた。現地調査では確認できなかったが、凶事に対処するための厭勝法も簡素化されていると想定できる。各地の共同体が土地神との結びつきを保持するブータン社会では、村人の命運を司り、彼らの心身に調和をもたらす一種の社会装置である占いが現在でも土地神の影響下に置かれている状況が観察できた。

最後にこれらの知見を古代チベット帝国時代のサイコロ占いと比較してみたい。古代の占いに用いられたサイコロは、1～4までの目を持つ棒状サイコロであったと考えられており、この点は現代とは大きく異なる。1つのサイコロを三度投じて得た目の組み合わせ如何によって吉凶が判断され、振り出した目の順序も考慮されるために卦辞の総数は64通りとなる。ここには、古代インドに由来するというPāśakakevalīとの類似性が看取できる[42]。また、現代のサイコロ占いを代表するペルデン・ラモの占卜書では、依拠尊や厭勝儀礼が一貫して汎仏教的性格を呈しているのに対して、古文献には仏教要素の介入が確認できない。古文献では、吉凶の由緒として、卦辞ごとに「～のお言葉によれば（～ *gyi zhal nas*, ～ *gyi mchid nas*, ～ *na re*）」という定型書式によって多種多様な神

[42] Franckeは Weberによって提示されたPāśakakevalīの卦辞と古チベット語文献中の卦辞を比較し、両者の類似性を指摘している（Weber 1859: 168–180, Francke 1928: 116）。確かに、Bower Manuscript中の文献でも四つ目のサイコロ1つが三度振られており、この占卜法の来源をインドに求めることには首肯できる。一方で、チベット本とPāśakakevalīの内容や書式には明らかな相違が見られる。したがって、チベット本がPāśakakevalīの系譜文献からの翻訳であるとは考え難い。

格名が引用される[43]。つまり、ここでは占卜法が 1 つの神格に依拠するのではなく、卦辞の各々が諸々の神格に由来しているのである。神格名には、オデ・グンゲル神（Lha o lde gung rgyal）やヤルモタン神（Lha dbyar mo thang）、タンラ・ヤシュル（Thang lha ya bzhur）、ヤルラ・シャンポ神（Lha yar lha sham po）といった古代の神々として知られる名も登場するが、大部分の名称は現代には知られておらず、仏教の神格であると同定できるものは 1 つもない。また、除災の方法としては「神を敬え」（*lha mchod gyis*）、「儀式、法要を行え」（*cho ga gyis zhig*、*rim gro byo shig*）といった簡潔な内容が指示されるにとどまる。このような相違があるにもかかわらず、家運や命運、商売運、病、敵、失せもの等の項目や、障りをなす悪鬼の名称には現代の占卜書との間に一貫性がみられる。また、神々への不敬な振舞い、不信心などに厄災の原因を求める点にも両者に通底する観念が看取できる。ここからは、日常の様々な事象に対する吉凶を神々に尋ね、災いや凶事が予期される場合には、占いによって原因を調べて適切な祓いの儀式を行うという招福除災のシステムが古代から現代へと継承されている様子がうかがえる。Tucci の見解に従えば、ペルデン・ラモがサイコロ占いの拠り所とされるのは、彼女が仏教の護法神でありながら、古文献に現れるようなチベット土着の神々をも内包する神格であるからだと推測できる。つまり、チベットでは古代から現代に至るまで、神々と人々との関係に調和をもたらすための装置として占いが機能してきたと理解できるだろう[44]。

ところで、ロナ・タシュは、「后妃伝」（Btsun mo bka’i thang yig）や「ミラレパ伝」（Mi la ras pa’i mgur bun）に収録された逸話を例に、予言者として登場するラモのサイコロ占いが病気の治療にも深い関わりを持っていたことを指摘している[45]。確かに、入蔵した日本人の旅行記の中にも、病気治療を目的として行うサイコロ占いの見聞録がみえるほか[46]、ラダックのシャーマンに関する報告の

---

43 筆者の見解によれば、テキストによっては神格名に代わって韻文形式の詩文や物語・格言の類が挿入されており、これらはいずれも占いの吉凶を相談者の心象風景に投影する役割を果たしている。

44 大蔵経中に収録されるテキスト（6）には、関心事ごとの吉凶や障りをなす悪鬼などが記されていない一方で、神々を観想し、その真言を唱えることを簡潔に指示した導入部が確認できる。したがって、テキスト（1）の系譜に属するような現代のサイコロ占卜書は、古代の占いのシステムを継承する一方で、実践方法に関してはテキスト（6）のようなインド由来の文献の伝統を取り入れつつ、仏教的除災法を大幅に発展させて形成されたものであるという文献の成立過程が想定できるのではないだろうか。

45 Róna Tas（1956：172–176）。

46 例えば、野本（2001：221–222）。

中にも、サイコロ占いを治療に用いる事例が確認できる[47]。この背景としては、チベット文化圏の人々が、病を引き起こす原因の 1 つに、神々や悪鬼といった超自然的存在の介入を認めているという状況がある。病を患った際には、原因となる超自然的存在を同定し、適切な祓いの儀礼を行い、心身に調和をもたらすことが必要とされる。病因を診断するための方法の 1 つに、本稿で取りあげたサイコロ占いがある。現代の占いに古代からの機能が継承されているとするならば、古代チベット社会においても病気の治癒を目的とした儀礼にサイコロ占いが使用されていた可能性は十分に考えられる。古文献中には病や凶事の厭勝法として「ボンをせよ（*bon byos shig*）」という助言が見られるが、「ボン」の範中には治療や除災の儀礼が内包されていたのであろう。一方で、Dotson の研究にあるように、古代チベットでは契約や法律の範疇を超えた訴訟案件について、サイコロによる決定が仲裁をなすことがあった[48]。人が定めた規則では判断できない裁きについて、神の助力を仰いでいたのである。つまり、数多の神々や悪鬼と人々が共存するチベット社会において、占いは常に人間と超自然的存在の仲介者として機能してきたのであり、人はサイコロを媒介として彼らを敬い、なだめ、時にはその助力を求めて個人の心身の状態や共同体生活の調和を保ってきたといえる。

以上のように、古代から伝わる人と超自然的存在との関係性や、それを反映する占いのシステムが仏教的外装をまといつつ現代へと継承され、神や悪鬼と共存する現実が表象される様子が、サイコロ占卜書の内容から読み取れるといえよう。

参考文献

［中文］
才让（1999）.《藏传佛教信仰与民俗》北京：民族出版社。

［日文］
今枝由郎（2006）．ケープ・ルンツェン法要儀軌の校訂テキスト．『佛教大学ア

[47] 山田（2009：216–231）。
[48] Dotson 2007.

ジア宗教文化情報研究所研究紀要』第二号：1−13頁。
スタン，R. A.（1993）．『チベットの文化 決定版』東京：岩波書店。
西田愛（2008）．古チベット語骰子占い文書の研究．『日本西藏学会々報』第54号：63−77頁。
野本甚蔵（2001）．『チベット潜行 1939』東京：悠々社。
別所祐介（2004）．チベットの山神崇拝と村落社会．『アジア社会文化研究』第五号：124−145頁。
宮本万里（2014）．現代ブータンにおける屠畜と仏教――殺生戒・肉食・放生からみる「屠畜人」の現在について――．『ヒマラヤ学誌』No.15：72−81頁。
山口瑞鳳（1987）．『チベット』（上）東京：東京大学出版社。
山田孝子（2009）．『ラダック ――西チベットにおける病いと治療の民族誌――』京都：京都大学学術出版会。

［欧文］

Aris, Michael.（1979）. *Bhutan -The Early History of Himalayan Kingdom*. Warminster: Aris & Phillips Ltd.
Blondeau, A. M. and E. Steinkeller（eds.）.（1996）. *Reflections of the Mountain, Essays on the History and Social Meaning of the Mountain Cult in Tibet and the Himalaya*, Wien: Verlag der Österreighischen Akademie der Wissenschaften.
Bühler, Johann Georg.（1891）. A Further Note on the Mingai or Bower Ms. *Wiener zeitschrift für die kunde des morgenlandes* vol.5: 302−310.
Dani, A. H.（1963）. *Indian Palaeography*. Oxford: Clarendon Press.
Dollfus, Pascale.（1996）. No Sacred Mountains in Central Ladakh? A. M. Blondeau and E. Steinkeller（eds.）*Reflections of the Mountain, Essays on the History and Social Meaning of the Mountain Cult in Tibet and the Himalaya*, Wien: Verlag der Österreighischen Akademie der Wissenschaften. 3−22.
Dotson, Brandon.（2007）. Divination and Law in the Tibetan Empire: The Role of Dice in the Legislation of Loans, Interest, Marital Law and Troop Conscription. Kapstein, M. and Dotson, B.（eds.）*Contribution to the Cultural History of Early Tibet*, Leiden: E. J. Brill. 3−77.
Filliozat, Jean.（1953）. Les science. Louis Renou et Jean Filliozat, *L'Inde classique. Manuel des études indienne* Tome II, Paris: Bibliothèque de École Française

d'Etrême Orient, Imprimerie Nationale.138−194.

Francke, A. H.（1928）. Drei weitere Blätter des tibetischen Lousbuches von Turfan. *Sitzungsberichet der Preussischen Akademie der Wissenschaften*, VIII: 110−118.

Hoernle, A. F. Rudolf.（1891）. A Note on the Date of the Bower Manuscript. *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 60: 79−96.

———（1893）. *The Bower Manuscript; Facsimile Leaves, Nagari Transcript, Romanised Transliteration and English Translation with Notes*. Calcutta: Archaeological Survey of India.

Kanakura, Yensho *et al*.（eds）.（1953）. *A Catalogue of the Tohoku University Collection of Tibetan Works on Buddhism*. Sendai: The Seminary of Indology Tohoku university.

Loewe, Michael and Blacker, Carmen.（1981）. *Divination and Oracles*. London: George Allen & Unwin.

Lüders, Heinrich.（1907）. Das Würfelspiel im alten Indien. Göttingen: *Abhandlungen der Königlichen Gesellschafy der Wissenschaften*.

Namkhai Norbu, Chögyal.（2013）. *A history of Zhang Zhung and Tibet* vol.1 *The early period*. Arcidosso: Shang Shung Publications.

Nebesky-Wojkowitz, Réne de.（1993）. *Oracles and Demons of Tibet*. New Delhi: Book Faith India.（First published 1957, The Hague.）

Róna Tas, A.（1956）. Tally-stick and Divination-dice in the Iconography of Lha-mo. *Acta Orientalia Hungaricae* VI: 163−178.

Sander, L.（1987）. Origin and Date of the Bower Manuscript, a New Approach, *Investigating Indian Art: Proceedings of a Symposium on the Development of Early Buddhist and Hindu Iconography Held at the Museum of Indian Art Berlin in May 1986*. Berlin: Museum für indische kunst. 313−323.

Todd, Burt Kerr.（1952）. Bhutan, Land of the thunder dragon. *The National Geographic Magazine*, Volume CII: 711−754.

Tucci, Giuseppe.（1980）. *The Religions of Tibet*. California: University of California press Berkeley and Los Angeles.（First published 1970 as Die Religionen Tibets. *Die Religionen Tibets und der Mongolei*.）

———（1980）. *Tibetan Painted Scrolls*. Kyoto: Rinsen Book Co., Ltd,（First published 1949, Rome: La Libreria Dello Stato.）

Waddel, Austine.（1974）. *Buddhism & Lamaism*. New Delhi: Heritage publishers.（First published 1895, Books form India, London.）

Weber, Albrecht.（1859）. Uber ein indisches Würfel-Orakel. *Monatsberichte der Königlichen Akademie der Wissenschaften*: 158−180.

西田　愛（にしだ　あい）
神戸市外国語大学（客員研究員）

岩尾一史・池田 巧（編）
『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』
京都大学人文科学研究所　2018年 3 月刊